

Essay

二人の人間の出会いが香水を作る

中野香織 (服飾史家)

Kaori Nakano

キリアン・ヘネシーというパフューマーがいる。コニャックの老舗ヘネシー家の8代目で、コニャックの香りとともに育った彼は、香水ブランド「キリアン(By Kilian)」を創設した。来日時にお目にかかって以来、愛用する香水にはキリアンが増えた。なかでも「ラブ、ドント・ビー・シャイ」や「イントキシケイティッド」など、呼吸するたびに独特の幻想的な世界に引き込まれ、それこそ中毒になる。

この2つの香水を調香したのは、カリス・ベッカーという女性の調香師である。キリアンの大半の香水を手がけているほか、名だたるブランドの香水を創り上げている。そのなかにはディオールの「ジャドール」もある。

この映画で重要な役割を果たす「ジャドール」である。それに気がついたとき、映画のヒロイン、「ジャドール」を創ったアンヌのモデルは、カリス・ベッカーなのかもしれないと思った。インターネットでは、香水の本質について熱く語るカリスを見ることができる。白いシャツ、ラフなボブヘアの彼女は、エマニュエル・ドゥヴォス演じるアンヌを彷彿とさせる。ちなみに、カリス・ベッカーは2017年にジボダン・パフューマリー・スクールの校長に就任し、2019年5月に

はフランスの芸術文化勲章シュバリエを受賞している。フランス香水界の大御所である。

カリスのみならず、フランスでは調香師という職業は、「ネ(nez)」(一流の鼻をもつ人)と称され、成功すれば、詩人や作曲家のようなアーティストとしての扱いを受ける。スター調香師も綺羅星のごとく存在する。ジャン＝クロード・エレナ、ドミニク・ロピオン、エドゥアール・フレシェ……。名前をこうして書くだけで彼らが作るそれぞれにユニークな世界が脳内に立ち上がってくる。こうした調香師を「作家」として扱い、自身は「編集者」として出版社をイメージした香水ブランドを立ち上げた起業家もいる。「エディション・フレデリック・マル」を立ち上げたフレデリック・マルである。マルは2020年秋に調香師たちと議論するオンライン・パフューム・サミットを開催し、インターネットで発信した。「二人の人間の出会いが香水を作る」「香水は神秘的に見えるが、実はぎりぎりまでそぎ落として明快なシンプルティを追求している」など各調香師から放たれる香り高い名言にうっとりした。ああ、フランスの香水の世界にはなんと多才な人材が活躍しているのだろう。





もちろん、調香師すべてがトップアーティストとして活躍できるわけでもない。ペットのトイレ、車のシート、洗剤、シャンプー、ジュースにお菓子など、名前が表に出ない地味な仕事に携わるケースも多い。公共環境の悪臭を改善するという難度の高い仕事を調香師が手がけることがある。この映画は、そんな調香師の知られざる仕事から華やかなパフューム・クリエイションにいたるまでを幅広く見せてくれる。彼らの仕事がいかに私たちの日常生活を支えているのか、驚く発見も多い。

脳と直結する繊細な感覚に基づく仕事ゆえに、彼らのストレスも小さくない。ヒロインのアンヌは、「ジャドール」で脚光をあびたあと、次作に対するプレッシャーや同業者の嫉妬などがストレスとなって鼻が利かなくなるという危機に見舞われる。仕事生命が絶たれるも同然。そんなどん底の日々に出会ったのが、離婚して娘の養育権も仕事もなくしそうな、雇われ運転手のギョームである。演じるのはグレゴリー・モンテル。

このふたりの関係がなんとも現代的で、素敵なのだ。まったく違う世界に住み、性格も真逆に近いのに、お互い

率直に言葉や態度に表すものだから、最初はケンカの連続。でも意外な形で補い合い、助け合い、少しずつ相手の世界を学ぶうちにそれぞれの人生に想定外の影響が及んでいく。その意味では王道のパディムービーでもある。「最強のふたり」みたいな。フランス映画の男女だからって、恋に落ちたりはしないところがかっこいいし、共感もてる。何よりもこの関係の信頼感から生まれるワクワクする感じは、恋よりもラグジュアリーである。「二人の人間の出会いが香水を作る」という前出の名言をあらためて思い出す。

蛇足ながら、日本を代表する化粧品会社の企画に携わる人の話によれば、匂いの仕事における日本の課題で最も多いのは、「消臭」だそうである。匂いをゼロにする消臭技術は世界一。個性を生かすより消す方を選びがちな社会だとそういうことになるんだろうな。悪臭を消すのではなく、それに別の要素を加えて違う快い匂いに変える、というセンスと技術をもつ調香師を高く評価する社会を、少しだけうらやましく思うことが時々ある。